



日本文学全集 12

南総里見八犬伝

河出書房新社

日本文学全集12 南総里見八犬伝

© 1961

編集委員

青野季吉 荒 正人
川端康成 瀬沼茂樹
中島健蔵

装 幀 者
原 弘

N D C

昭和 36 年 5 月 5 日初版印刷

昭和 36 年 5 月 10 日初版発行

定 価 290円

訳 者 白 井 喬 二
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 中 内 佐 光
印 刷 晁 印 刷 株 式 会 社
製 本 岸 田 製 本 紙 工 業 株 式 会 社
本文用紙 王 子 製 紙 工 業 株 式 会 社
同 納 入 株 式 会 社 大 和 屋 洋 紙 店
ク ロ ー ス 日 本 ク ロ ー ス 工 業 株 式 会 社
同 納 入 株 式 会 社 小 島 洋 紙 店

発 行 所 東 京 都 千 代 田 区 株 式 河 出 書 房 新 社
神 田 小 川 町 三 の 八 会 社

電 話 東 京 (291) 3721~7
振 替 口 座 東 京 10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

目次

南総里見八犬伝

第一輯	三
第二輯	四
第三輯	八
第四輯	一六
第五輯	一五
第六輯	一五
第七輯	三九

第八輯	三六
第九輯	三四

注	池田弥三郎	三五
年	麻生磯次	四六
解	花田清輝	四三

南総里見八犬伝

第一輯 卷之一

第一回

季基訓を遺して節に死す
白竜雲を挟みて南に帰く

後花園天皇の御代永享十年のことであつた。

京都にいた六代將軍足利義教と、関東管領として鎌倉にいた足利持氏との間が不和となつて、ことごとくにいがみ合つた。そして、あげくのはて合戦となつた。この合戦で、持氏は、將軍方についていたわが家來の上杉憲実のうさぎのけんじつに攻めたてられて、鎌倉の報國寺でとうとう詰腹を切らされた。これは翌十一年の三月十日のことだつた。

このとき、長男の義成は父持氏とともに自害したが、二男の春王と三男の安王は、あやうく敵軍の囲みをのがれて、下総の国に落ちのびた。というのは、この土地には持氏の家來結城氏朝がいたからであつた。氏朝は義を知る武士であつたから、さっそく主君のわすがたみ二人を迎え奉じて、京都側の命令に従おうとしなかつたばかりか、やがて攻め寄せて來た追つ手の大軍にも屈せず、

迎へうけて勇敢に闘つた。さればそれを聞いて、里見季基をはじめ持氏にかねて恩顧のあつた武士どもは、死をも辞せずわれもわれもとばかり走せあつまつてきて、一団となつて防ぎ戦つたので、結城の城はいつかな陥る氣配もなかつた。

籠城すること、永享十一年の春のころから、嘉吉元年の四月まで、前後実に三年の長きにおよんだ。けれど孤立無援——そうそうは守りつづけられるものではなかつた。第一、もう兵糧も矢種もつきてしまつた。

ある日ついに、一の木戸やぶれ、二の木戸やぶれ、敵兵はどんどんと城内にはいつてきた。結城の一族、里見の主従、今はこれまでと覚悟をきめ、木戸おしひらいておのおの切つて出たので、見る見るうちに味方の屍は山をきずき、たちまち城は落ちてしまつた。

俗にいうこれが結城の合戦である。

里見季基も、落城と見ると、いざ最後の一戦とばかり馬にむち入れて走り出ようとした時、ちょうど目の前で長男の義実も、やはり討死のかくごらしく、獅子奮迅のいきおいで戦つていたが、さらに敵陣深く追すがろうとするところだつた。

「おお又太郎、まで——」

と季基は思わず馬上からよびとめた。せがれの治部大夫義実、このときはまだ十九歳の又太郎御曹子。そう呼ぶ

方がふさわしかった。

「はっ父上、わたくしもごいっしょに」

「おろかも、親子もろともここで死んだら、里見の家はだれがつぐぞ。京鎌倉を敵としてこれだけ戦えば、武士の面目はもはやじゅうぶん。父は節義のために死ぬが、子は後日をかながえ、ひとまずここを落ちのびて、時機をまつて、里見家再興をはかるこそ汝のつとめとわからぬか」

激しくしかられて、義実は鞍の上に頭を低くたれ、そしてその首を少しく左右にふった。

「いえ父上、その儀は私とてわからぬではありませんぬ。しかしながら、のがれることなら三歳の童児もできますが、たいせつな死すべき時に死すことかと心得ます。文武の道、順逆の理、かねてのわきまえから申してもぜひひこのまま冥土のお供つかまつりとうございます」

「まだわからぬか」

季基はしきりと嘆息した。しかしそれはまた感動でもあった。せがれの顔をつくづくと見詰めて、よく成人したものだ、腹の中でたのもしく思つてよろこびにたえなかったが、今はここで長談義の余裕はなかった。口ではわざと怒った語氣をつかつて、強くしかりつけ、かつ、さとして聞かせた。

「それでもわからねば、もはや親でもない子でもない」

とまで最後に言い切った。

こうなつては義実も父に逆らうわけにはいかなかった。はっ——とばかり、馬の轡に取りすがつてさめざめと落とす涙、その間に父季基は乱軍の中へと影を消した。

「いざ、若殿——」

悲痛にくれる義実の両わきにすばやく駆け寄つて、馬のくつわを取つたのは、譜代の老臣である杉倉木曾介氏元と、堀内蔵人貞行の兩人であつた。さあ、お供つかまつらん——と口早にいざなつた。そして、そのままとうとう馬を走らせ西をさして落ちて行つた。

ふりかえれば結城の城のやぐらは、はやえんえんとひと筋赤い炎をあげてもえさかりすごい黒煙につつまれていた。父はおそらく戦死したであろう。里見冠者義実はあとに心を引かれながら、のがれのがれて、相模の国は三浦の矢取の海辺にたどりついたときは、嘉吉元年四月十七日の日はもうしずみかけ、夏がすみがしずかに夕ぐれの海をこめ、白いカモメの眠るのであらう、ときどき鳴く音も聞こえて、打つて変わった平和なのどかさが、そこにあつた。

「若殿、あれが安房の山々でございます」

ゆびさして、堀内蔵人がいった。かなたにぼんやりうかぶ鋸山、まことにノミでけずつたような緑と土くれ

の絶壁のながめだった。だが義実は、やがて、いつまでも安閑とながめておられる旅の身そらでないと気がついたか、急に口を切った。

「そうだ。くらんど、きそのすけ兩人」

「はっ」

「安房へわたろう。安房へわたって里見家再興をはかる」

「いかにも。それがよろしゅうございます」

「しからば木曾介、舟をさがしてまいれ」

はっと答えて杉倉木曾介は舟をさがしに出かけた。

実をいえば舟も舟だが、食べものにも飢えていた。家来のぶんざいとしては、自分とはともかくとして主君へなにか適当な食べものをまいらせねばならぬ。しかし、舟一艘みづからぬばかりか、ひとかけの糧さえ手にはいかなかった。

そのとき、海の方がとつぜん荒れ模様となってきた。

やがてしのつく雨、稲妻さえひらめき、はては雷がなりはためいたかと思うと、むら雲立つ中に、何かきらきらと光るものがあった。目のせいかな、気のまよいかはわからぬが、その光りものは竜のうろこのように見えた。いや、たしかに白竜と思えるものが、ひとつ、波しぶきを巻きあげ、雲をかきわけるようにして南をさして飛び去った。

「あつ、りゅう……」

「うん。そちがたの目にも、そう見えたか」

義実は勇みたつ声でさげんだ。竜は神物であるから、これは吉祥にちがいない、必定わが家の興る前ぶれであるうと、主従はいろいろと古事を引き合いによるこんで語り合い、さればと堀内蔵人が船を求めに出かけると、こんどはうまく一艘さがしあてた。そのとき、雨後の空はさわやかに晴れて、月もよく風もよく、清い光の水にうつるなかを、舟はなめらかにはしって、やがて主従はつつがなく安房の地についた。

第二回

一箭を飛して俠者白馬を悞
両郡を奪うて賊臣朱門に倚

安房は三方を海に囲まれた一握りにできそうな小さい国であった。

そのほぼ東岸には長狭、朝夷の二郡、西岸には平群、安房の二郡がそれぞれ南北につらなり、あわせてもわずかに四郡の小国ながら山々に限られているので、なかなか幽邃な土地柄をほこっているのであった。

ところがよくしたもので、こんなへんびな国であればこそ、遠くさかのぼって平家全盛の昔、治承三年は秋の八月、源氏再興の旗挙げがならず石橋山の戦にやぶれた源頼朝が、敗残の身をかるうじてこの安房に寄せたと

き、この国の土豪であった麻呂、安西、東条の三氏がま
 っさきにはせつけて無二の志をささげたのであった。そ
 の功によって源氏が天下統一の後は安房四郡をそれぞれ
 に分かちあたえられて以来、ずっと長い間というものの、
 はげしい世の有為転変の波にもかえって襲われずに済ん
 できたともいえるのであった。

さて義実主従がのがれて安房についたころは、平群の
 滝田の城は東条の一族である神余氏がうけついで、当代
 の城主は神余長狭介光弘であった。それから館山の城主
 は安西三郎大夫景連、平館の城主は麻呂小五郎兵衛信時
 で、さながらかなえの足のように対立していた。中でも
 神余のいきおいがもっともさかんで、本家東条の領地も
 あわせて、ほとんど安房の半ばを領し、安西、麻呂の両家
 をおさえて安房の国主として臨んでいたときであった。

ところがこの長狭介光弘は心おごって酒色にふけり、
 側女の玉梓という淫婦に心をうばわれて家来の賞罪のこ
 とまで口ばしを入れさせたので、心ある良臣はみな去り、
 あとに残る側臣は佞人ばかりとなつてしまった。中でも
 山下柵左衛門定包という色白く鼻高くくちびるの赤い言
 葉づかいのごく柔和な家来は、うまく玉梓にとりいって
 ひそかに姦を通じ、あげくのはて主君の光弘を殺して、自
 分が滝田の城主になろうという不敵の考えをいだくにい
 った。すると滝田の近村着海巷に住む杣木朴平という

ものがあつたが、百姓ながら武術にすぐれて、気概にみ
 ちた男だったので、同志洲崎無垢三とかたらつて、領内
 の平和をたもつために定包を討ちとることを思いたつ
 た。ある日定包が主君と共に遊山に出かけたときをねら
 って矢を放ったが、運わるくその矢は定包にあたらず、
 あやまって主君の光弘にあたつて殺してしまった。定包
 にとつてはみずから手を下さずして思ひ壺にはまったと
 言えるのであった。

けれどもとより定包はそんな氣ぶりは露ほども表わさ
 ず、木陰にかくれていてヒュウと矢を放つと、腕前のす
 ぐれぬため、矢は少しねらいがはずれて朴平の股のあた
 りにグザと刺さつた。定包はそのときはじめて木陰から
 姿をあらわして声高らかにさげんだのであった。

「やあやあ。国のためには数代にわたる主人、民のため
 には父母にもあたる尊い殿を、そこない奉るとはなんだ
 る逆賊ぞ、ここに山下柵左衛門定包あり——ただいまの
 一矢は、わざと生け捕るために急所をはずしたのであ
 る。それ者ども、かやつに駆け寄つて容赦なくひつとら
 えよ」

わっと鬨の声をあげて、兵どもはおしよせた。杣木朴
 平はもとより命を捨ててかかっていることだから、兵な
 どには恐れはしないが、この時はじめて、さつき射落と
 したのは主君の光弘で、当の定包は無事であることを知

って、さすがにびっくり仰天した。

「や、さては仕損じたか。鵜の膏のくいちがいはこのことであろう。無念だ残念だ——」

じだんだふんでなおも戦ったが、多勢には敵しがたく同志の無垢三はうちとられ、朴平はついに捕われて牢に引かれて行き、そこで拷問にかけられた末、痛手にたえやらず即日死亡したのであった。二人の首はさっそく青竹の先につらぬかれて梟首にされ、これでこの騒動もひとまず終わりをつけた。もうけものをしたのは悪運の強い定包であった。その後いろいろと手段を用いて、まゝと安房の国主になりすましてしまった。

定包の国主ぶりはまことに言語道断であった。まず滝田の城を玉下城と改名した。自分の山下の下の方に、淫婦玉梓の玉をくつつけたのである。そしてその玉梓を本妻としたばかりか、光弘時代の他の妾どもは、そのまま全部自分の妾として枕席にはべらせた。

人間の野心はとどまり知れないものである。彼は城内の富貴歓楽だけでは満足することができず、威を近隣に示そうと思いたった。そこで隣郡の館山平館へ使者をつかわしてこういつてやった。定包は不肖にして、こんど思いがけなく長狭平群の主となった。そこで御両君と親交をむすぶ必要があると思うが、当方から出むいて行こうか、それとも御両君の方からやって参らるるか否や、

というのであった。言葉は表面おだやかだが、その底は威嚇であるから、受けとった方では無礼を感じないはずはなかった。

そこで平館の城主麻呂小五郎信時は、ぐっとこたえたものか、ある日、館山の城主安西景連をたずねて、定包との対抗策について相談を持ちかけた。

「おぬしと、力を合わせたなら、定包のごとき何事かあらうと思う」

「いや、その心はわしも同感だが、急に攻めたてることが陰香であらう」

二人はしばらく意見をたたかわした。

この押問答の最中、はたはたと、廊下に足音がきこえて安西の家来が伺候した。

「ただ今、里見又太郎義実と名乗る武士が、おとずれてまいりました」

「なに里見義実が」

「はい、見たところ十八、九歳かと思われます。従者はわずかに二人、下総結城の落人なりと申しつけております。三浦より渡海して、当国白浜へ着いた由にございませす」

「して、何の用事で参ったと申している」

「用事は主人に見参の上にてとのことで、答えませんでした。いかが取り計らいましょう」

「はて——」
と安西景連は、とっさに取り計らいの決断がつかないか、小首をかたむけ、はては眉までひそめて、しばらくは思案沈吟のていであつた。

卷之二

第三回

景連かげつら信時のぶとき暗に義実を阻む
氏元うじもと貞行さだゆき厄に館山に従う

義実がたよつて来たとのことを聞いていた客人の麻呂信時は、思案のつかずにいる景連にむかつて、こう言葉をはさんだ。

「里見は名ある源氏ではあるが、ここには縁もよしみもない。それに親の討たれるのも見返らずおめおめ逃げかくれて流浪さすらいうごとき義実である。対面したもうな」

「しかし彼は名に負う勇将であるから、一応対面して、もしわれらの下に使える者ならば、定包討伐の一方の将としてはいかがでござろう。もしまた会って氣に入らねば、その時は滅ぼすばかりだ」

「なるほど。よし、それもよからう」
信時はうなずいて賛成した。

そこで対面となると、相手が実戦の場数をふんだ勇将づれであるだけに、こちらとしても警戒を要した。物々しい警護の士を張りこませたりして、準備万端やつたとのうと、義実主従をはじめて座敷の中にみちびき入れた。

義実はこの大げさな警戒をそれと察したが、少しも動揺の色もなく、

「お会いくだされてかたじけない。結城の敗将、里見又太郎義実、亡父治部少輔季基の遺言によって、生くべきでない身を、敵軍の囲みからのがれて走り、漂泊の末にここへ参じた次第でござる」

「ここを指して参られたる次第は」

景連は、じつと見詰めながらそういつて問い返した。

「そのことでござる。なんと申すこともなければ、ただ御当国は、都はさらなり、鎌倉管領にも属さず、まったくの自由の天地。ここにたよつて安国の民となるこそこの上もなき幸いと思つたからでござる。ところが、到着してみて必ずしもさにあらずと感じ申した」

「さにあらずとは」

「ここにはこの波乱あり、自然と耳にふれる巷談こうだん街説うわさ、それもよしこれもよいが、武士は武芸を志すものゆえ、義によつて一臂ひとひでのちからをつくすこともあらばと存じ、思わず虎威こゐをおかして参上つかまつた次第。敗軍

の将をきらわず対面をおゆるしたまわった寛度、かたじけなくぞんずる」

義実のいうことは謙譲だったが、態度は堂々としていた。

そのとき目を光らせていた麻呂信時が、主人席の横から口を入れて言った。

「これ客人待たれい。当国は三面すべて海であるから、室町殿からも管領からも犯されぬという意味か。それなら一知半解、われらは隣国の強敵にも犯されずに今日までの日を過ごしてきているのじゃ」

「それはぞんじております」

「ぞんじておるなら、貴公から国内の安泰を説かれる義理はない。第一、身のおきどころがないからといって、縁もゆかりもない、それも罪人同然の者を救って、わざわざたたりを後日に招くようなことをするのはばかげている。わしはこの対面は反対であった」

地金を現わして信時はのしった。

けれど、義実にはにっこり笑って臆しなかった。今までと変わりのない態度で、自分が結城の城にたてこもったのは、義の一字を守るためだと言った。鎌倉の管領持氏卿が、世にさかんなところは、安房上総はいうまでもなく、八州の武士はたれ一人として、出仕しない者はなかった。それなのに、いったん持氏が滅亡したとなると、

誰も恩ある昔を顧みようとしなかった。その中で、わが父季基は幼君のおんために、家をわすれ身をすて、氏朝に力を合わせて、結城の城にたてこもって義を全うしたのである。だが勢いにつくは人心、麻呂、安西の御両所が、私を救うては後日のたたりをおそれると言うならば、それまでのななし。和議をあきらめ、縁なきものと思ひ袖をはらってこれよりただちに辞去いたす、ときっぱりした口調で答えた。

「これ客人、お待ちあれ」

景連は立ち上がろうとする義実を、いそいで押しとどめた。そして、胸に一物というのか、そっと信時をなだめ、さらに義実にむかっていった。

「そなたは、かつて結城の守将ではあったろうが、今はともかく流浪の人だ。わが陣に加わって、この土地の悪将滝田の城の定包を討つとならば、それはやはり、まずわが軍令に従わねばなるまい。もとより、おぬしの力で大功を立てた暁には、二郡の主となっても少しも異存はない。さあどうじゃ、それでも去るか、それともここにどまるか」

「わかりました。仰せのとおり寄るべき身の上、ここにどまりましょう。とどまるからには万事お指図に従うことにいたそう」

「よくぞ申した」

景連は満足そうにうなずいてから言った。

「しからば、わが家の嘉例として出陣の首途に、まずもって軍神に鯉を供えたい。三日のうちに貴殿が手ずから釣りあげて来られよ。約束を違えたならば和議の志なしと見て容赦なく処置いたすかもしれないぬぞ」

これはすこぶる難題だった。なぜならば安房一円どこへ行っても土地がらとして鯉はいないとわかっていた。それを見越しての申し条であるから、約を果たさなかった時は、いい口実にして主従の首をはねようという悪辣な魂胆であった。

「いや心得ました。鯉をとらえて参ろう」

そうとは知らぬ義実は、気軽に承知してしまつたが、納まらぬは氏元、貞行の二人の老党であつた。事もあらうに主君を漁師扱いにする彼らの非礼なやりくちに、思わずかつと憤つて、ここをすみやかに見限つて上総へ参りましよう、袖にすがらんばかりにしきりとすすめたが、義実は左右の二人を顧みて静かにだめた。

「はやまるまいぞ、兩人。君子は時を得て楽しみ、また時を失うても楽しむと聞く。いにしえ太公望のごとき人傑でさえ七十近くまでも世に知られず、渭浜の里にむなしく釣をしていたではないか。漁を卑しむことはない」と、言い聞かせ、ひたすら釣の用意をうながすのであつ

た。

第四回

小湊に義実義を聚む
管内に孝吉誓を逐う

義実主従は毎日足をはこんで、あの淵この川岸に立ちつくして、朝から晩まで糸をたれ竿を握つたが、ほかの魚はいくらでも釣れるのだが、鯉は一匹もかからなかつた。今日で三日目、長狭の白簗川の岸べに来て、しんぼうよくやつてみたが、やっぱりだめだった。

「今日が三日目か」

「期限の日でございまする」

主従は顔を見合せて思わすため息をつくのであつた。

このとき、はるか川下から、誰か何か歌いながらやってくる者があつた。耳をすまして近寄るのを待っていると、どうやらその者は同じ歌をくり返しくり返し歌っているらしく、だんだんと文句が聞きとれてきた。

里見えて、里見えて

白帆走らせ、風もよし

安房のみなどに寄る船は
浪にくだけず潮にも朽ちず
人もこそ引け、われも引かなん

「ほう……」義実は異様な気持にとらわれた。それは

まず冒頭の「里見えて」というのは、偶然かもしれないが自分の姓名に片寄せたように思えたからだ。気の迷いかもしれない、となおもその人物の現われるのを待っている、やがて姿が目の前に近づいて立ち止まった。よく見るとそれは一人の乞食風態の者だった。乞食はそこに立ってじっと義実の釣のありさまを見ていたが、とうとうのぞきこむように言った。

「なぜ、せっかく釣った魚を、そのように捨てなさるのだ。鮒もエビも、川魚としてはまず上の部じゃのに、心得ぬ人たちだ」

「わしが釣りたいのは鯉だからだ」

義実が正直なことを答えると、乞食は無遠慮に前にかがむようなかっこうをして声高らかに笑い出してしまった。

「なに鯉を釣るのだと。はははは、この土地で鯉を求むるのは、ちょうど佐渡で狐を捕えようとし、伊豆の大島で馬をさがすに似ておる。労して功なきことだ、おやめなさい。安房一国には土地柄で鯉は生ぜぬわ、それを知らぬとは迂闊千万の仁じゃ。また、鯉は魚の王で、一國十郡に満たぬ所には住まぬとさえ、昔から言い伝えられておるほどじゃ」

なかなか物知りの乞食である。義実はそのを聞いて思わず竿を引き上げてしまった。なるほど、言われてみる

とこれで麻呂、安西の魂胆がよめた。今までそれに気がつかなかった自分の不覚が急にはずかしくなった。乞食はやや顔色を柔らげ、なぐさめ顔に言った。

「いやしかな、一國十郡に満たねば鯉は住まぬというのは、おそらくこじつけじゃろう。その証拠には陸奥は五十四郡なのにやはり鯉はおらぬ。鯉の反対に人間は十戸の村でもけっこう忠臣孝子があらわれる。また里見の御曹子が上毛に生まれながら、こんな所にさすらって膝をいれる余地もないというのも、考えてみれば理に合わぬおかしな話だ」

「や、ではそなたはわしの名を里見と知って言われることか」

「実はうすうす存じてこれへ参りました。まず人目なき木陰へ参り、つぶさにお話しかまつろう。いざかなたへ」

主従はそれに従って山路へさしかかり、座を定めてまともに応対した。乞食はここに至ってはじめて里見義実と見こんでこれへ来た旨を、ちくいち語り明かしたのであった。

「それがしは実は、神余長狭介光弘の臣金碗八郎孝吉と申す者のなれのはて。父は老臣の第一席にすわる身分でござったが、その父死亡後、私は年少のため微禄となり近習に出仕しておりました。そのうち、主君の行状は日

に日にみだれ、淫婦玉梓^{たまずき}の色香におぼれて、日夜の酒池肉林、ついに佞人山下定包^{じやうほう}を重用して政務は手のつけられぬ乱麻のありさまとなりました。この儀お聞き及びではありませんぬか」

「うわさは、この土地にはいるや否や、すぐ耳にいたした。暗君のある所、みなそれだ」

「はい。で、私、おこがましいけれど、身をもつて殿を切諫^{きつせん}いたしましたところ、とうていいれられぬばかりか、身の危険をさえ感じて参りましたので、やむなく城を退いて他へ逐電^{ちくでん}、そのままちやうど五年の月日を経過いたしました。そのうち主家はついに滅亡。それも、奸臣定包とあやまって主君を射たる朴平、無垢三の兩人は百姓ながら、父の代には一ど若党としてわが家に召し使ったことのある者ども。されば兩人の無念を晴らすためにも、城を乗っとして今を時めく定包を討たねばなりませんぬ。けれど、私は城中にひろく顔を見知られておりますゆえ、ねらえど容易に近づくすべもなく、困じはてた末、ご覧のとおり全身にうるしの汁を塗って姿を醜くやつし、ひそかに機をねらっていたところ、時こそ来たれ。それは、あなた様の当地入国のおうわさです」

「ふん、なるほど」

「里見義実公、結城を落ちてはるばる渡り越されしと聞くからに、私をどんなに喜ばせ、かつ勇気づけたことで

しょう。かかる名君を擁して義兵を起こしたなら、悪政になやむ民たちはたちどころにみな君を慕い寄るは火を見るよりも明らかでございます。たとえ、麻呂や安西のやからがこばもうとも、何ほどのことやありましよう。定包を除いたあとは、安房一国は平和に復し里見の仁徳に国じゅうあげてなびくは必定と信じます。この儀はいかがでございます。なにとぞ御決意のほどを」

「わかった、やろう」

やや長い沈思黙考のすえに、義実はきっぱりと答えた。

義実主従は釣道具をなげすてその夜すぐ八郎孝吉と共に小湊におもむいて旗挙げの企てに乗り出した。

孝吉は道々、さっきの歌の話をして聞かせた。「里見えて里見えて」と歌ったのはあなた方の御様子を探るため

にとつさに作ったもので、里見をきかせたことはお察しのとおり。それから「白帆走らせ風もよし」は、白帆は源家の旗になぞらえたもので、旗挙げの縁起のため。

「安房の水門へよる船は」の船は、荀子^{じゆんし}に君は船なり、ということばがございますので、ふとそれをもじったまでの話、いやとんだ拙作をお耳に入れて赤面しごくだと告白した。義実も学を好む武将であったから、たいそうこの話をおもしろく聞いた。さて小湊に着いたときは、夏の日もとつと暮れて、二十日あまりの月が山の端か